

ひ　　だ　　よ　　ふ
飛　　田　　良　　文

学位の種類　　博士(文学)
学位記番号　　文第84号
学位授与年月日　平成5年7月8日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当

学位論文題目　東京語成立史の研究

論文審査委員　(主査)

教授加藤正信　教授中村　完
教授村上雅孝

はじめに

日本語は日本人の息遣いであり、思考の足跡である。我々は、日本語によって考え行動する。日本語の歴史において最大の出来事は、日本人が文字を獲得したときと、文字が全国民の共通の伝達手段となったときとである。

言語史研究は、話し言葉、書き言葉、伝達の道具、外来文化の影響という四つの視点によって考察すべきもので、伝達の道具すなわち文字やそれともなう筆記用具・用紙など、また電信・電話・ラジオ・テレビなども、言語史において忘れてはならない言語変化の要因である。そしてその背景に外来文化の影響がある。全国民の文字の獲得、伝達の道具の変化と多様化は、すべて西洋文化との接触によって始まった。

一方、社会体制は明治維新によって、士農工商の身分制から四民平等の時代へと変わり、首都は京都から東京へ移り、教育は藩校と寺子屋から小学校に統一され、日本人の関心は中国文化から西洋文化へと変わった。

本研究のいう東京語とは、このような明治維新にはじまる東京時代の言葉の意味であって、話し言葉も書き言葉も含む東京人の言語である。都市東京の人口は約半数が移住者で在り、土着の東京人ばかりではない。このような人口構成をもつ東京の居住者すべてを対象とし、生活環境の変化が江戸語から東京語への言語変化にどのような影響をおよぼしたか、話し言葉と書き言葉の両面から考察した。

本研究の構成は三部からなり、第一部 東京語研究の方法、第二部 江戸語から東京語へ、第三部 東京語各論研究からなる。

第一部 東京語研究の方法

第一部では、先学の東京語研究の歴史を概観し、新しい視点からの研究法を提唱した。

第一章では、東京語の成立過程について先学の諸説を、(1)東京語の基盤となった江戸語 (2)東京語時代の時代区分 (3)東京語の成立に影響を与えた外的要因 (4)東京語の定義、の四つの視点から整理・検討した。その結果、東京の言葉は、東京語・東京言葉・東京弁・東京方言、あるいは標準語・共通語などと呼ばれ、時と場合によって同義にも別義にも用いられ一定していない。そこで私は、新たに東京出身者と地方出身者との東京語観を調べ、東京語とは都会性・文学性・標準性を持ち、「土」に関する感情をもたない言葉と規定し、東京に住むすべての人を東京人と定義した。そして、その居住者が社会構造を変革するとともに言語を変えていったことを、言語生活の実相に焦点をすえて解明する必要性を論じた。

そのため、江戸と東京における話し聞く生活と読み書く生活を、身分・職業・性別などによる集団語の体系としてとらえ、その言語集団の特色を示すキーワードを探し出し、江戸語と東京語との関係をとらえることにした。

第二章では、時代区分を考える根拠として、明治・大正・昭和の政治史の区分をやめ、文字が全国民共通の伝達手段となったときを基準として、

東京語の成立期（明治元年から明治三十七年三月まで）

東京語の定着期（明治三十七年四月から昭和二十四年三月まで）

東京語の展開期（昭和二十四年四月から今日まで）

と区分した。これは小学生の就学率と、国定教科書の使用時期とを根拠にしたものである。国定読本の使用される前（「成立期」）と使用期間（「定着期」）と、使用されなくなったときから（「展開期」）とに区分した。そして、国定読本の言葉が国の制定した標準語であることを証明した。

第三章では、東京語研究の現段階を、成立論、言語要素論、資料論の視点から考察した。研究書の書名からみると、東京語が方言研究から都会語研究の対象になったのが昭和二十三年であり、概説書において音韻・文法・語彙・文章文体・文字表記のように言語要素別に記述されたのが昭和四十五年である。また、分野別通史では、文法史が昭和二十三年、文章文体史が昭和四十一年、語彙史が昭和四十六年、敬語史が昭和四十九年、文字史が昭和六十二年に東京語時代を含む通史が刊行されたが、音韻史はまだ存在していない。したがって、本研究は、これら各分野を包括した言語生活学的視点からの最初の成果と位置づけられる。

第四章では、東京語研究の資料論の必要性を論じ、(I)研究目的のための分類基準と(II)研究資料の性格を知るための分類基準とを考えた。本章では資料の性格を示す基準による分類を試み、(A)日本人の公的著作 (B)日本人の私的著作 (C)外国資料 (D)翻訳資料 (E)速記資料 (F)録音資料 (G)日本

人の日本語研究書 (H)総合資料に分類した。このうち、速記資料と録音資料は東京語時代に誕生した話し言葉資料群であり、総合資料(新聞・雑誌)は幕末に誕生した書き言葉資料群である。また、翻訳資料においても、直訳物と呼ばれる語学入門書の一群がある。例えば、デアル(現在)、デアリシ(過去)、デアリタ(現在完了)、デアリタリシ(過去完了)というように時制を訳し分けた明治初期特有の資料群である。これら直訳物が翻訳文に与えた影響は、はかり知れないものがある。

第二部 江戸語から東京語へ

第二部では、江戸語から東京語への移り変わりを、話し言葉と書き言葉との両面から調査し、言語集団旗本の言葉・役人の言葉が江戸時代共通語として存在し、これが東京語の基盤となり、国定読本に採用されたことを述べた。

第一章では、福沢諭吉の記した「旧藩情」によって、日本人の記した江戸末期の言語集団の種類とそのキーワードを明らかにし、また、外国人の記録した日本語観察として、S・R・ブラウンの *Colloquial Japanese*. 1863 と E・M・サトウの *Kuaiwa Hen*. 1873 に記された江戸語と江戸語観察の記録を分析した。そして言語集団の種類とその特色を示す人称代名詞を分類して、江戸語の重層的構造を明らかにし、上層武士・役人の言葉に、ワタクシとアナタが使用されていることを発見した。

第二章では、アメリカ人ウエンライトの『和英商話』(文久二年)と、士族の川本清次郎と内田弥太郎(幕臣)の訳した『英欄会話篇訳語』(明治元年)にあらわれる江戸語・東京語を調べ、会話書にあらわれる人称代名詞が外国人の場合も日本人の場合もワタクシとアナタに集中しており、それらの代名詞が国定読本の代名詞と一致していることを明らかにした。

第三章では、江戸の山の手地域に住んでいた直参の譜代大名・旗本・御家人と、外様大名とその家臣たちが、どのような言葉を使っていたかを論証した。例えば御家人であった大田南畝は一人称を、学者は「不佞」、御家人は「拙者」、藩中は「身ども」、侠者は「おれ」、通は「わっち」、二人称を、学者は「足下」、御家人は「貴様」、藩中は「貴殿」、侠者は「おみさん」、通は「ぬし」、と指摘している。

また、將軍徳川慶喜の言葉にワタクシとアナタが使用されていること、大政奉還後も旗本・御家人は約三分の二が山の手に残っていたことを論じ、東京語の基盤となったのは、町人言葉でも、教養層の言葉という漠然とした言語でもなく、ワタクシやアナタを使う將軍・旗本を中心とする言語集団の言葉(尊大語を除く)がそのまま東京語へ受けつがれたことを論証した。

第四章では、江戸が東京と改称され、行政区画が拡大されていくにともない、武士・商人・職人・芸能人・遊女など江戸の言語集団の言葉がどうなったか、それぞれの言葉集団のキーワードが消滅していったかを述べた。さらに、東京語時代の新しい知識集団、男学生と女学生の言葉の形成過程をとらえ、それらの新知識人の男女が結婚したとき、そこに発生した山の手生れと下町生れの言語

問題を、父と母の呼び方、例えばオトウサマ（山の手言葉）とオトツツァン（下町言葉）の対立に焦点をすえて述べた。これら「ゆえ」のある言葉は、国定読本の用語（父はオトウサン）によって統一され、話し言葉の標準語が確立したのである。

第五章では、教育制度の変化、筆記用具の発達、就学率の向上にともない、文章活動はどのように変化したかを(1)書式のある文章 (2)個人の文章 (a)公表しない文章 (b)公表する文章 (3)編集した文章 (4)宣伝の文章 (5)教育用の文章 に分けて検討した。例えば、詔勅・法令・戸籍・願・届・証・書簡・日記・学術書・啓蒙書・文学書・新聞・雑誌・広告・教科書などそれぞれの文章が言文一致運動によって、文語文から口語文へと移行していく様子を具体例によって示した。そして、国定読本に記された言葉が話し言葉とともに書き言葉にも標準語を与えたのである。

第三部 東京語各論研究

第三部では、言語要素を音韻・語彙・文法・文章文体・文字表記の五分野に分類し、それぞれの分野の研究の現段階を第一章で概観した。第二章以下はその分野の未開拓の言語現象について調査し、その変化の過程と原因について分析した。

I 音韻

第一章では、音韻現象について概観し、東京語の特色は、連母音、漢字音、外来音に著しいことを述べた。

第二章では、「願う」「笑う」などのワア行五段活用動詞の終止形・連体形語尾が長母音オー〔o:〕から連母音アウ〔au〕へ、いいかえれば、〔nego:〕から〔nerau〕へと変化する現象を、J・C・ヘボンの『和英語林集成』を中心に考察した。オーからアウへの変化は明治二十年ごろ完了し、変化は単純語から複合語へ、音節数の少い語から多い語へと進行している。そしてこの変化の原因は開合の消失による同音語の増加を嫌う示差機能回復の要請によるものと推定した。

第三章では、「思う」「追う」などのワア行五段活用動詞の語尾が長母音オー〔o:〕から連母音オウ〔ou〕へ変化する現象を考察した。これも前章と同じく『和英語林集成』を中心に調査し、ローマ字表記の辞書・会話書、国語調査委員会編纂の『音韻調査報告書』、国立国語研究所の『日本言語地図』の方言資料と比較した。変化の過程も原因もオーからアウへと動揺である。

第四章では、ソんキャウからソんケイ（尊敬）へ、ヒギャウからヒコウ（飛行）へのように呉音から漢音へ読み方の変わる語と、逆に、インシンからオンシン（音信）へ、ジンギからニンキ（人気）へのように漢音から呉音へ読み方の変わる語を調査し、漢字音の交替する現象を考察した。呉音から漢音への交替が圧倒的に多く、その変化は前者が明治二十年前後に集中して現れるのに対して後者は著しい集中がみられない。また、二次漢語では一字目が二字目より早く交替する傾向があり、字音の交替する語には文章語が多くみられる。したがって、呉音から漢音への変化は、文字を知らなかった人々が字書を利用して漢字を一字一字読み、その規範を学問の伝統である漢音に求めたためである。

第五章では、アンジツからアンシツ（庵室）へ、モウゾウからモウソウ（妄想）へのように漢語の連濁が消滅する現象と、ゲサンからゲザン（下山）へのように連濁の生ずる現象があり、前者の消滅する現象が優勢である。その変化の時期は明治二十年ごろに集中するのに対して、後者の連濁の発生は個別的で集中しない。また、連濁の消滅する語には古語が多いので、文化の原因は、字書によって一字一字読んだためであろう。

第六章では、ジンジユクがシンジク（新宿）となるヤ行拗音の直音化現象を、明治以前と以後に分けてその用い方を調査した。明治以前は、しくろう（宿老）、ていし（亭主）など無学の者が直音化した語形を使い、Yedo dialect と記されている。明治時代においても同様で、『浮雲』（二葉亭四迷・明治二十年）では、旧主義を代表するお政は「亭主」のように直音化し、新主義を代表する文三やお勢は「下宿」のようにヤ行拗音を使用している。この直音化現象は本来、漢字音の日本語化を示すものであるが、昭和四十年前後になると日常語（亭主、下宿など）から文化を反映する語（芸術など）へと広がり、さらに外来語（ビジュアル、レジメなど）にも広がっている。

II 語彙

第一章では、語彙研究の現段階を概観し、東京語の話し言葉では身分・職業・性別による言語集団の使い分けが統一され、語種では漢語（訳語）と外来語に特色のあることを述べた。

第二章では、新聞用語を対象として、明治・大正・昭和の各時代でそれぞれ使用度の高い上位百語をとり、移り変わりの実態を明らかにした。明治時代は和語が圧倒的であるが大正には和語が減って漢語がふえ、昭和には漢語が更に多くなり、和語と漢語の割合が逆になる。いいかえれば、漢語の増加に時代の動きを見ることができる。

第三章では、漢語を「字音によって読む語」と定義し、呉音と漢音の読み方の使い分けを明らかにした。貝原益軒の『点例』や式亭三馬の『浮世床』などの記述によって、仏書には呉音読み、儒書には漢音読みが行われ、話し言葉においても、山本蕉逸の『童子通』には「書生ヤヤモスレバ俗間通用ニモ漢音ガ勝ツモノ也」と記されている。

仏書と儒書の読み分けは、藩校と寺子屋の教育制度が統一され小学校になると混乱を生じ漢語の読み方は一方に統一されるか、混交語を生み出した「言語」（ゴンゴとゲンギョからゲンゴ）の歴史を論証した。

また、市立と私立、化学と科学など、同音語をもつ漢語は、明治→大正→昭和へと増加しており、字数に注目すると、一字漢語が明治→大正→昭和へと減少するのに対して、二次漢語が急増している。同音語が世間で問題にされるのは、漢語が視覚にたよる書き言葉の世界から、聴覚にたよる話し言葉の世界に進出し、その使用頻度が高くなったためである。

第四章では、明治初年における漢語の大流行が、どうして生じたのかを、知識人の和語批判、漢語批判から考察した。坪内逍遙は、漢字は全廃したいが、「漢語は立派な固有の日本語であるから、通例上中流に分る限りの雅語と共に盛んに用いてよいと思ふ。いや用ひなければ迎も複雑な、精緻な、而も新しい思想や感情は言ひあらはせまい。新しい熟語も拵へねば不便なこともあろう。」と

漢語の必要な理由を述べている。一方、和語については、井上哲次郎が、和語だけでは「言へぬことが多い、マルで言へぬことが沢山ある」と論じ、巖谷小波も和語は「言葉が足りない」と指摘している。

このように漢語の流行は、今日の外来語の氾濫と同様に、外来文化の移入にともなう必然的な現象であった。

第五章では、西洋文化がどのように移入されたか、蘭学者・英学者の翻訳法をさぐり、江戸時代の翻訳は、原文の文意をとるだけではなく、それを漢文またはそれに近い表記の訳文にすることをしていた。また、「訳字」という用語が用いられ、今日の訳語と外来語とを含む広い概念をもっていた。

その訳字には「先哲撰用ノモノ」に従う習慣があり、その中には、『博物新編』『格物入門』など中国の漢訳洋書に典拠をもつ翻訳語が多い。また明治の翻訳語の問題点は、「十種ノ訳書ヲ読メバ同一ノ原書ヲ十様ノ異ナル漢字ニ訳スル者アリ」（矢野文雄著『訳書読法』）という点にあった。この点は、明治十五年に東京帝国大学教授菊地大麓が「学術上ノ訳語ヲ一定スル論」を発表してから統一に向った。

第六章では、「よく高く」「より早く」と使われる副詞「より」と、英語の比較級 tall, taller, tallest の taller の訳語「より高く」との関係を追及した。そのため、明治初年の英語教育制度と教科書について調査し、開成所や慶応義塾で使用された英文典、リーダーの学習参考書、『クワッケンボス英文典直訳』と『ピネヲ氏原板英文典直訳』を中心に、リーダー直訳の訳文から論説文へと一般化する過程を跡づけた。

第七章では、外来語のうち、食生活の分野から、スープ、カレーライス、アイスクリームの三語について、その受容過程を明らかにした。英語起源のスープはオランダ語起源のソップと交替したこと、カレーライスはライスカレーと語形が交替したこと、アイスクリームは氷菓子などの訳語から外来語へ交替したことを明らかにした。その交替には文化の優位性、英語の普及、イメージの大衆化などがかかわっていることを述べた。

第八章では、西洋の新しい概念を移入した新語には(1)新しく造語した「新造語」と、(2)外国語を借用した「借用語」と、(3)在来語を転用した「転用語」の三種類があることを論じ、江戸時代には新語を造語するには漢字・漢語を使用できる言語集団とできない集団の存在したことを指摘した。したがって、文字使用が平等になった明治三十七年四月から、造語法は統一される。そこで、庶民の造った新語（借用語、転用語）と、知識人の造った新語（新造語、借用語、転用語）に分けて例証した。

Ⅲ 文 法

第一章では、品詞別に概観し、特に変化が著しいのは身分制度の崩壊にともなう待遇法と、外国語の影響によるものであることを述べた。

第二章では、「笑った」「笑うた」、「思った」「思うた」のようにワア行五段活用動詞の連用形に

「た」「て」が付くとき、江戸語では促音便形とウ音便形が使われたが、東京語ではウ音便形が明治期に消えていく過程を考察した。ウ音便形は江戸語では武士階級及び武士に準ずる人に限って行われ、明治期の東京語ではペダンティックな語感をともなった。

第三章では、「察する」が「察しる」へ、「信ずる」が「信じる」へと、サ行変格活用動詞が上一段活用化する現象を『和英語林集成』を対象に分析した。語尾には「する」となるものと「ずる」となるものがあり、上一段化するの「ずる」語尾が圧倒的で、その中でも、語幹が一字漢字の二音節語と、和語の三音節語に著しい。そして、それらは語幹の末尾語が鼻音か長母音である。

第四章では、完了の助動詞「ちゃう」の成立過程を、活用形の誕生に焦点をおいて考察した。「ちゃう」は東京の俗語といわれ、明治後期に誕生したといわれているが、山田美妙の『白玉蘭』（明治二十四年）に見え、日本文典では明治三十四年の石川倉次著『はなしことばのきそく』に記載されている。また、昭和十四年には柳田国男が東京語のなかの「標準語で無いもの」「口の言葉」の例とし「イチャウ」を挙げている。このように、「ちゃう」は話し言葉として使用され、明治期には、「弱る」「消える」「心配する」「困る」など暗いイメージの語に付くが、昭和期になると「拝む」「感心する」「明るくなる」「好きになる」など明るいイメージの語にも付くようになり、俗語から共通語へ定着しようとしている。

第五章では、S・R・ブラウンの *Colloquial Japanese*. 1863 と同著者の *Prendergast's Mastery System*. 1875 の会話文に現れる敬語動詞「ござる」「なさる」「くださる」「おっしゃる」「いらっしゃる」の連用形と命令形について調査した。これらラ行変格活用動詞の連用形は「た」と「て」が付くとき、マスが付くとき、例えば「な[。]さ[。]つて」から「な[。]す[。]つて」へ、と母音の無声化がみられ、また「な[。]さ[。]ります」から「な[。]さ[。]います」へ、のように江戸語から東京語への移りゆきを示し、命令形も、「な[。]され」かに「な[。]さい」へ移りゆく過程を示している。

第六章では、東京語を反映する知識集団「書生」が、自分や相手をどのように待遇したかを考察した。一人称・二人称・人名につく接尾語については、書生同士と書生以外の人物への待遇語の体系が単純である。例えば、書生同士なら、「僕」と「君」だけで目上にも対等にも目下にも使用でき、人名は呼び捨てであった。これは、勤王の武士たちが、江戸末期の動乱の中で藩と身分の壁をのりこえ、自由に平等に意志を通じるための知恵であった。

IV 文章・文体

第一章では、文体を漢文・漢文直訳体・和文体・候文体・欧文直訳体・普通文・言文一致体に分類し、言文一致運動による口語文の成立過程について述べた。言文一致体は、明治三十三年創刊の「言語学雑誌」を中心に口語体の名称が普及し言文一致体にかわった。

第二章では、漢文を公式の文章とした詔勅文が、いつ漢文を廃止し、また明治四十年に公式令が出るまでの間にどのような文体が使用されたかを考察した。漢文は明治二十三年が最終使用で、明治二十四年からは文語文に統一された。また、二人称代名詞の「汝」「爾」「卿」が文体による敬意表現にかわって明治四年から使い分けられている。

第三章では、高山樗牛の書いた書簡文が候文は、実父・兄弟・師友・女性へとすべての文通範囲に用いられ、文語体は実弟に、口語文は実弟と親しい友人宛で、宛先による使い分けが存在した。そして候文には「拜啓」「敬具」などの書簡用語が使用され、口語文にはほとんど使われない。また口語文には？／＼／＼などの補助符号があり、親しさを表わす文体と意識されていた。また、書簡文の言文一致運動は明治三十三年九月四日付けの「万朝報」にのった堺枯川の「風俗改良案」が最も早く、樗牛の口語体書簡は、これに呼応するものであった。

第四章では、明治二年に誕生した伝達手段電報の文章が、どのような文体であったかを考察した。明治二十二年には、物集高見が電信文は、「全く言文一致で、話しのように書くもの」（日本文章論）と指示している。そこで文範集の例文、実際に使用された公衆電報の文例を調査し、話し言葉が生き生きと使用されていることを例示した。最初は文末語に「ヨシ」「アリ」「ナシ」など文語体が明治十年まで見えるが、以後は口語文になっており、言文一致の最も早く実行されたものといえる。そして、文部省著作の『尋常小学読書本』にのせられた口語体の電報文によって普及していく。

第五章では、普通文という文体がどのようにして誕生したか、明治時代の論説、作文入門書、文部省の教科書編集方針などから考察した。論説と作文入門書にみえる普通文は、文語体と口語体とがあり、文体の統一を目的として考えられた新文体であった。文部省は明治三十三年八月二十一日文部省令第百四十五の「小学校令施行規則」第三條で「近易ナル普通文」を指示し、それは文語体をさしていた。その文法上の諸問題を整理したのが、明治三十八年文部省から発表された「文法上許容スベキ事項」であり、国定読本の文語文が普通文の実例であることを明らかにした。

V 文字・表記

第一章では、漢字・仮名・ローマ字の国字問題と、仮名遣い・送り仮名・振り仮名・句読点などの表記法について述べた。これらの問題は、いずれも文部省の国語政策によって国定教科書の紙上に具現され整備・統一された。

第二章では、日本に国語国字問題はどのようにして起ったか、その発端となった前島密の「漢字御廃止之議」の主張とその時代背景をさぐり、江戸時代における漢字批判の延長線上にこの提案がなされたことを論じた。明治以前の漢字批判は中国と西洋の文化を比較した宣教師の言葉、あるいは蘭書が契機となっており、漢字廃止論の評価は、日本・中国・西洋の三者の関係から見直すべきである。

第三章では、振り仮名研究の現階段を概観し、明治初期の代表的翻訳小説『月世界旅行』（井上勤訳）の実態を漢字片仮名交じりの文の初版（十分冊本）と漢字平仮名交り文の再版（一冊本）について調査した。初版本は振り仮名が四分冊目から多くなり、再版本は総ルビになっている。これは初版本を学術書として翻訳したが、読書を配慮してルビを増やし、再版は小説として読者を想定したことを示している。

第四章では、恋愛小説『^{欧州}奇事花柳春話』（丹羽純一郎訳）の振り仮名の位置とその語種との関係を調査した。本書は漢字片仮名交り文で、『月世界旅行』と同様に学術書として翻訳された。右側

ルビは読み方を示し、左側ルビは意味を示している。両側ルビもあるがその役割は同じで、右側、左側という位置が振り仮名の性格を示している。

第五章では、経済書『富国論』（永峯秀樹訳）の振り仮名が前二書とは異なり、右側ルビが、漢字の読み方（訓）を示す場合と、示さない場合があり、『月世界旅行』や『花柳春話』の左側ルビの役割をはたしている。この右側ルビと左側ルビの役割の相違はサ行変格活用動詞語幹の振り仮名と「スル」との接続で区別できる。

第六章では、漢文の句読点、蘭文の句読点を概観し、日本文の句読表示がいつはじまり定着したかを考察した。文の終わりに「・」、文中の区切りに「、」を使う表記法が公式に認められるのは明治二十九年、文部大臣官房図書課が「句読法案」を発表してからである。明治十四年伊藤圭介が句読段落の表示の必要性を主張してからの短い期間に、仮名論者・ローマ字論者・速記者・文学者などがどのような工夫を凝らしたか、実態を調査した。句読表示の試みは十種類をこし、「、ゝ・」方式と「、・」方式が中心をなし、前者は蘭文・英文・露文の影響を受け、後者は中国の漢訳洋書に根拠がある。

日本の文明開化、日本語の近代化がスムーズに進んだのは、これら江戸後記の蘭書・漢訳洋書による知識の集積があったからである。

論文審査結果の要旨

本論文は、東京語の成立過程を、江戸時代語からどのように受けつがれ、変化したかを、話し言葉と書き言葉の両面から実証し、社会的変動を視野にいれて考察した最初の体系的論述である。

第一部「東京語研究の方法」では、第一に先学の諸説を検討し、東京の言葉が、「東京語」「東京弁」「東京方言」あるいは「標準語」「共通語」などと呼ばれて、同義にも別義にも用いられ一定していないので、東京出身者と地方出身者との東京語観を調査し、新たに、東京語とは都会性・文学性・標準性をもち、「土」に関する感情をもたない言葉と定義する。論者は、この東京語が都会語であるという認識に立って、その居住者が、話し聞く生活と、読み書く生活を変革するとともに、言語をも変えていった過程を解明しようとする。そのため、身分・職業・性別などを異にする江戸時代の集団語の体系を明らかにし、それらがどのように東京語の新しい集団語に改編されて行くか、社会言語学的な新しい視点から考察しようとする。

第二には、標準語・共通語・東京語を区別し、存在しないとされていた標準語が、実は国定教科書の言葉であり、国の制定した標準語であることを論証した。そして、これの存在する期間を根拠とし、また小学生の就学率も参考として東京語の時代区分を行った。その区分は、成立期（明治元年から37年3月まで）、定着期（明治37年から昭和24年3月まで—国定教科書使用期）、展開期（昭

和24年4月から今日まで)である。本論文は、直接には、このうちの成立期を調査・研究の対象とするものである。

第三には、東京語研究の現段階を、成立論、言語要素論から考察し、東京語成立史の視点からは本論文が先学の諸説と異なる新説であること、および音韻史・語彙史・文法史・文体史・文字史の全言語要素を包摂した最初の成果として位置付けられることを述べている。

第四には、資料論の必要性を論じ、資料の性格を示す基準による分類をはじめて試みている。東京語資料のうち、速記資料、録音資料は東京語時代に誕生した話し言葉資料群であり、翻訳資料においても直訳物と呼ばれる語学入門書の一群は明治初期特有の書き言葉資料であることを明らかにしている。

第二部「江戸語から東京語へ」では、第一に、外国人の日本語研究書(S. R. ブラウンの *Colloquial Japanese 1863* と、E. M. サトウの *Kuaiwa Hen 1873*) から江戸社会の言語集団の種類とそれぞれの特徴を示す人称代名詞を体系化して、江戸語の重層的構造を明らかにした。第二に、英学会話書(「和英商話」文久2年)、「英蘭会話編訳語」明治元年)の代名詞が国定読本と一致することを論証した。

第三に、日本人の日本語観察記録により、江戸の山の手地域に住んでいた直参の譜代大名・旗本・御家人と、外様大名とその家臣たちの使用する人称代名詞が明治以降の東京語に受けつがれたことを明らかにした。

第四に、東京語時代の新しい言語集団、男学生と女学生の言葉が形成されて行く過程を明らかにし、彼らが成長したときに発生する、山の手と下町の言語問題を、国定読本の用語が解決の方向へ導いたことを論証した。

第五に、教育制度の変化、筆記用具の発達、就学率の向上にともない、言文一致運動によって、書くジャンルの文章が文語文から口語文へと移行していく様子を例証した。そして、国定読本に記された言葉が、話し言葉にも書き言葉にも標準を与えたことを実証した。

第三部「東京語各論研究」では、Ⅰ音韻、Ⅱ語彙、Ⅲ文法、Ⅳ文章文体、Ⅴ文字表記の各部門でどのような言語現象に変化が見られるか個別に検討し、東京語の成立過程を細部にわたって実証した。

音韻では、「笑う」などの語尾が〔waro:〕から〔warau〕へと変化する現象、ソソキョウ(尊敬)がソソケイへ、と漢音と呉音の交替、モウゾウ(妄想)がモウソウへ、という連濁、非連濁の交替、シンジユク(新宿)かシンジクか、というヤ行拗音の直音化などを、多種類の資料から詳細に跡づけた。語彙では、新聞用語を対象にして、大正・昭和へと近代漢語が増加していくことを展望しながら、当時の多くの語を吟味し、個々の語については、例えば「東京」のトウケイからトウキョウへという変化を近代的な社会体制の確立との関連で論じた。また、翻訳語、外来語、新語の造語法についても考察し、これの成立には、教育の普及による一般人の漢語の習得という基盤が力になったとしている。

文法では「笑うた」から「笑った」へ、「察する」から「察する」へ、「てしまう」から「ちゃう」への変化、敬語の変遷等を考察している。

文章文体は、詔勅が漢文から文語文へ、高山樗牛の書簡文が候文から口語文へ、電報が文語文から口語文への変わる実態を、また、明治特有の「普通文」と呼ばれた文体は、文体を統一する目的で考えられた新文体で、国定読本の文語文に実現したことを明らかにした。

文字表記では、日本の国語国字問題がどうして起こったか、前島密の「漢字御廃止之議」をめぐって、その時代背景を考察した。また、振り仮名が右側と左側にあるが、その位置と役割について考察した。さらに、句読点が現代の「、」「。」の二点方式に決まるまでを調べ、西洋文および中国の漢訳洋書の影響であると論じている。

第三部全体の結論として、論者は、西洋文化の影響による教育の普及、文字の獲得が近代日本語としての東京語を可能にしたが、その前提に蘭学や漢訳洋書による知識の集積があったことを指摘し、その力によって明治の近代化・近代語化がスムーズに進んだと述べている。

以上、本論文は、日本の標準語としての東京語に関して、江戸時代共通語の言語基盤を確かめつつ、明治37年までの間における、その成立の様子を、多くの確実な資料の精査により、言語の全面にわたって叙述している。これは従来見られない大きなスケールであるとともに、個別的言語現象においても多くの新発見が含まれている。本論文は、論者が過去に学術誌に発表した定評あるものに修正を加えた30編分と、今回新たに執筆した10章分によって成り、その構成は緊密にできている。ただ、長年にわたる研究のため、早期の研究項目と最近の研究項目とで、若干の叙述方式の相違が指摘できなくもないが、これは本論文の内容を損なうものではない。また、東京語の成立史という言語の諸面にわたる複雑な事象が論者の観点のみで割り切れるものではないが、国定読本の使用に焦点を当てたことは、「論」として傾聴に値する。

いずれにせよ、本論文は、日本語研究によって最重要テーマの一つである標準語としての東京語の成立史を、確実かつ豊富な資料を用い言語の全部門にわたって叙述し、その社会的背景との関連も論じた総合的な言語研究であり、前人のなし得なかった大作としての学術的価値は高いものである。

よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。